

して、出して見ると酒が澄んで居る。ハテ稀代な事があるものぢや、澄切つた酒が酒桶の中に有るので、如何いふ譯ぢやと、その酒をあけて見ると桶の底に灰が沈んであつた、ハ、ン、若い者が火鉢を投込んだ爲に澄切つた清酒が出来たのやと、サアこれが始りで、清酒の製し法をば發明して追々と賣出した、すると大層酒が賣れる、ところから運の附き始めぢや、その年より倍も造り、その翌年は四倍も造るといふやうになつた、段々酒を澤山造るやうに運が附いて、遂に身代を仕上げて、それから儲けた金を資本として兩替屋を始め、諸國の大名衆へ御用達をして、ドーンと運が附いて来て、日本で鴻池と人に知られるやうになつた。ドーンと運が附いたので運附ぢや、又三井八郎右衛門と言ふ人は、往昔六十六部に出て伊勢の國へ出て来た、或る山寺に一泊をしたら夜中に庭前にピカ／＼と火が燃へる、ハテ不思議と思ひ雨戸を開けて見ると、その

言ふたら誰知らぬ者も無い、ドーンと運か附いて、これもど運附ぢや、未だある。大阪の木綿屋橋の辰巳屋と言ふこの仁は伊賀の辰巳の渡守やつた、僅な渡賃を貰ふて船頭をして居たが、或時一人の客を渡した、すると後で不圖見ると船の中に金包が落ちてあつた、彼の人<sup>の</sup>人が落したに違ひない、そのうちに取りに来られるであらうと待つて居たが其の日は取りに来なんだ、其れから我家へ持つて歸り、其の金を神棚へ上げて置いて今日は取りに来るやらうか明日は取りに来るやらうかと待つて居たが、遂に一年と言ふものは何の音沙汰もなかつた、其の翌年同じ人が此の渡し船に乗つた其の時、貴郎は去年の今月此の船へ乗りなされはしまへんか、はい乗りました、其時お金を百兩落しはなされませなんだか、はい落しました、左様か船の中に落ちて有りましてので取りにお越しになるかと待つて居りましたが、お越しがないので私の宅に預かつてござり

片傍の井戸の中から火の玉が燃へて出るので、これは何か狐狸妖怪の類ひの所業であるであらうと思ふて居るうちに夜が明けたので、それから彼の井戸の中をば探して見ると、その井戸の中から金子が三百兩出たので、その三百兩の金子を村方へさして持つて行き預けて置いたが、さて別に誰が取落したと言ふ者も無いので、全く此の金子はお前さんの身に備はつた金である、依つてにと言ふところからその三百兩の金子を以て、伊勢の松阪にチョツとした呉服屋を始めた、ところが店の品物がドン／＼賣れる銀主が段々附いて来て、追々と店も立派になりサアこれが運の附き始めで、段々運が附いて来て、到頭三井と言ふ立派な大阪には高麗橋、江戸にも店を出した、井戸の中から出た三百兩が資本で、彼れだけに三井八郎右衛門と誰も知るやうになつたので、三井の印は井筒の中にその三百兩の三字を入れたんぢや、今では日本國中三井八郎右衛門と

ます。モウ取りにおいでるかと今以てチャンと神棚へ上げて置きましたので私がこれから一ト走り取て來ますと言ふと、その人は日向の延岡の人で、イヤ中々感心なお方ぢや、失禮ぢやが斯ういふ渡場の船頭をして居なさるお方にも似合はぬ正直な人ぢや、私には備はらぬ金ぢやに依つて決して戻さいでもよい、お前さんでは商賣も出来まいから、及ばずながら私がお前さんの後を利用して進ぜるからといふので、其處で日向から炭を送つて貰ふて、初めて大阪へ出て来て炭屋を始め、それが始まりで炭が彼方へも此方へも能う賣れてそれが運の附き始めぢや、それが遂には木綿屋橋の橋詰角引廻した辰巳屋と言ふてドーンと運が附いてど運附ぢや。お前さんの宅も元から斯ういふ大家でもなかつたやらう、これだけの田舎に似合はぬ大きな酒屋になるのもドーンと運が附いて、これまでに成りなかつ